

正宗白鳥

生まざりしならば



生まざりしならば

牛島夫妻は、芝の家を出ると直ぐに、小田原へ電報を打って置いて、銀座でビスケットや餡あんパンや牛肉の罐詰や甘栗や、それに絵本だの玩具おもちゃだのをドツサリ買込んで、予定の時刻に新橋から汽車に乗った。四五日続いた酷寒のあとで、今日は急に春になったように温かったので、重ね着した肌は汗ばんで、スチームで温められた車室にじっとしているのが気持が悪いくらいであった。おそではセルのコートを脱いで地味な大島の羽織をも脱いだ。

成るべく気に留めないうようにと心掛けているのに関わらず、汽車に乗るたびに、人々の風俗が目についてならぬいのであったが、今日は土曜日で、箱根へでも行くらしい客と、丸鬚まるまげに結った芸者とが彼女の真向いに乗合せていたので、ことに無関心ではいられなくなった。さほどの容色きりようではないが、歳が若くって身装なりがいいから美しく見られると思われるにつけて、自分が浮世を棄てた気で身じまいをかまわなくなつたことが顧みられた。いやに取澄ましているその女の目が絶えず此方へ注がれているらしいのが次第うらに煩さく思われだした。「なんだい、鼻

の下の長い赭あかっ面つらの、口の中の臭におそうな男にねだって、
たまに遠出をするのに、金満家の奥様おくさまにでもなった気で
いるから、チャンチャラ可笑おかしい」と、反抗的な気持に
さえなつた。

「こう温かいと小田原は梅が咲いてるだろう」と、夫の
長吉が窓外の春めいた景色を眺めて云つたが、おそでは
返事をしなかつた。

横浜から乗った客の中にも、芸者連れの一組がまじつ
ていた。この方は大勢で、誰れも様子ぶらないで、悪巫わるふ
山戯ざげをし合つては騒さわぎだした。おそでは其向いの芸者に

よって、焦立いらだたしい思いをさせられていたのを忘れて、
新たな客の騒さわぎを見ては、自分もその仲間に加わっている
ような思いをして笑った。停車場で買ったサンドイッチ
や蜜柑なども、駄洒落だじゃれを言い合っているいろに戯れなが
ら食べているのを見ると、いかにも旨うまそうに思われた。
男の一人が甘納豆を手玉に取って、口を空へ向けてその
一粒々々を巧みに受けては自慢すると、他の男も芸者ど
ももその真似をした。若い芸者が紙撚こよりをつくつてそつと
男の襟えりに挿むのを見ると、おそでは自分たちが昔してい
た悪戯いたずらを思出して可笑しくなった。一人の男が縁起結び

にした紙を老妓に貰って、それを額に載せて顔を仰向けにして、額の紙を鼻の下まですべり落して、突出した唇で受留めると、他の男も女も熱心にその芸当を真似た。老いたる顔の長い男は、目をパチクリさせて紙をこらせながら、「おれは長つ面だから前途遼遠だ」と云うと、おそでもみんなと一しよに声を出して笑った。

「馬鹿なことをしてる」と、長吉は小声で云って、年甲斐もない老人の所行を苦々しく思っていたが、

「あんな人、気さくでいいじゃないの」と、おそでは云った。この頃は次第に気六かしくなつて来た夫も、昔は

あんな馬鹿遊びをして日を暮らしたこともあったのだと、昔を懐かしがっていたが、

「俊一は停車場へ迎えに来てるだろうか」と、夫が話掛けると、周囲の騒ぎは他所事となつてしまつて、心は俊一の上にもみ集まつた。

「気分が悪くさえなければ迎えに出ていますさ。上田さんにもこの前そう云つてあるんだから、楽しみにして出掛けてるでしょうよ。あの子の気が向いたら明日は自動車で箱根へ遊びに行こうじゃありませんか。あの綺麗な湖水を一度見せてやりたいと思つていますの。屹きつと度喜びま

すよ。湖水なんてまだ見たことないんでしようから」

「お前は時々妙なことを云うね」と、長吉は柔和な切れの長い目に微笑を浮べて、「俊一が湖水を見たことがあるかないか、誰れよりもお前が一番よく知ってる筈じゃないか」

「本当にそうでしたわね。上田さんが私たちに秘密で俊一を箱根なんぞへ連れて行きやしまいし、外にあの子をかまっつて呉れる者はないんですから」と、おそでは自分と夫との外には、世界中で、あの羸弱かよわい一人子の手頼たよりになるものは一人も半人もないことを、今更のよう

い詰めながら、「でも、私、時々はこう思うんですよ。

……あなたは笑いなさるかも知れないけれど。……俊一は私たちが気がつかない間に、いろい로운変った事を見たり聞いたりしているんじゃないかと思われるんです。

あの子は突拍子もないことを云うって、あなたは笑いなさるけれど、俊一にはそういうことを云う訳があるのかも知れませんよ。私たちに分らないからって、一概に笑って済ましちやいけないでしょう。……上田さんの不断の事だって、なかなかよく知っているんですもの。学校へ行けないから、読書は十分に出来ないけど、智慧は人

一倍にあるんです。あなたは小さいものだど、誰れでも
見くびっていらっしやるからいけないの」

「智慧はどうでもいいから、身体がもっと丈夫になって
呉れればいいんだがね」

「それは、身体だって丈夫になりますさ。身体がよくな
らないのなら、なんであの子一人を小田原なんぞへ打っ
ちやらかして置けるのですか。五年しか寿命のない子
は、何処にいても五年しか生きられないと極きまったなら、
私は一日だって、あの子を私の側から手放しすりやしま
せんよ」

「それはおれだってそうさ」

長吉も今日は、今までに例のないほどに俊一の身の上を案じていて、それに関聯した自分たち夫婦の将来についてもおそでよりはもっと深刻に思い悩んでいたので、黙って独りで考えているのは堪えがたかったが、俊一の事に深入りした話を触れると、今日はおそでが人前をも憚らないで、非常識なことを云ったり、泣声をしたりする恐れがあるので、虫を殺して彼女に逆わないようにして、わざとニコニコしたりしていた。

おそでは例の芸者連れの一組の方へまた目を注いだ。

そちらでは魔法壘やポケットトウイスキーが取出されて、酒盛がはじめられていた。

さつき泣きだしそうにしていたのに、もうあんなものを面白がって見ていると、長吉は妻の気まぐれを浅間しく思ったが、その方が昨夕のような狂態を見せられるよりは無事でよかった。小田原通いも既に一年あまりになるのであったが、彼れは今度ほど暗い気持で汽車に乗ったことはなかった。部屋借りなぞして俊一に不自由な思いをさせるのが痛々しさに、無理な工面をして、小さいながらも去年の夏に別荘を建ててからは、月に二三度夫

婦連れで俊一を見舞に行くのは何よりもの楽しみになっていて、「あの子のためにならどんな苦労でも厭わない。衣服なぞどんな流行おくれの物を着ていてもいい。たとい借金に責められても、あの子だけは出来る限りの贅沢をさせてやりたい」と、夫婦は心を一つにして話合っていたくらいであったが、今日は別荘を建てたことをも長吉は後悔していた。自分が死んだあとまで俊一が生残っていたのなら、どんなに悲惨であろうかと思ふと身の毛もよ立だつようで、いつそ今のうちに、自分たちに看護されながら穏かな往生を遂げて呉ればいいと、かつて思い

もそめなかつたことを望んだりしていた。

国府津こふづあたりまで来ると、俊一が出迎えに来ているかどうかと、二人は頻りに気にしだした。が、小田原へ着いて見ると、看護婦の上田も来ていなかつた。

「今日は加減が悪いのかしら」とおそでは心淋しくなつた。

「電報がおくれたのかも知れないね」と、長吉は気休めを云つた。雑沓している電車に乗るよりも今日は歩いて行こうと云つて、土産物を両手に提げて停車場を出た。そして、電車には乗れない俊一が、歩くか、俵くるまに乗る

かして此方へ来かかっではいけないかと、それを待設けながら向うへ目をつけていた。

おそでは芸者連れの一組を乗せた自動車が、自分の側を威勢よく行過ぎるのを見送りながら、ちよつと眉を顰ひそめた。

「あなたもたまには、あんな風に陽気に遊びたいと思いなさらない？」

「そんなことを思ったって為し様ようがないじゃないか。いつになつても余分な金は出来やしないのに」

「お金のあるなしに関わらないでさ。あなたは全くああ

いう気持になれなくなつたのかしら。人間の性分も歳を取ると変つちまうことがあるんですかね」

「おれは別段性質が変つたようにも思われな。変つたのは顔付ぐらいなものだ」

「顔の変つたのは私ですよ。女は若くなくちや駄目ね。私たちの前にいた丸鬚に結つてた芸者は若いから艶があつて綺麗だつたわね。あなただつて始終横目を使って見ていたじゃないの」

「何だ、馬鹿な。前にいる女を見るのに横目を使ってどうするんだい」

長吉は苦笑した。彼れは若い時分の不身持ふみもちのむくいで、生れながらに病毒を宿している俊一を生んだことを、この頃は果しなく悔いるとともに、そういう因果な子を自分のために生んだ田舎芸者の小千代に対して、ややもすると憎悪の念を抱くようにさえなっていたが、小千代ばかりではない。芸者というすべての芸者を誼のろうような気持ちにさえなっていた。芸者の出る宴会をば成るべく避けるようにして、たまにそういう処へ行っても不快な感じに苦しむのを例としているほどで、さつきも、汽車の中でいろんな芸者連れの客と乗合せて、自分の愚な昔を見

せられるようなのに悩んでいたのであった。

おそでは、夫が若い美しい女を見ても、以前のよう
心を動かさなくなったらしいのが、本当だとして、喜ぶ
よりも、男としての衰えとしてむしろ物足らなく思うの
であつたが、そうして気取って上べだけ装っているのだ
と思われて小憎らしかった。

「でもあの芸者はちよつといい女ね。あなただつてそう
思うでしょう。高慢ちきなところがあるからいやだけど、
騒いでた芸者とはまるで人柄がちがうじゃないの」

「それはそうだ……」長吉は、おそでが何時になつて

も、芸者という者を女の中の花でももあるように思極め
ているのを卑んだが、自分が骨の髄までも芸者ぎらいに
なっていることは、おそでの痛い処に触れる訳なのだか
ら決して口へは出さなかつた。

「あのくらいの芸者を自分のものにして大威張で旦那顔
をしようとするのは大抵じゃないわね」

「それはそうだ」

「あなたは四十にはまだ大分間があるのに、お爺さんじ
みちやっただんですね。男は陽気なことが好きなようでな
くっちや出世しないのじゃないでしょうか」

「お前は時々は陽気になつてはしやぎだすから仕合せだよ。尤も昨夕のように陽気になり過ぎて取組みをやつたりしちや困るけれどな」と、長吉が笑うと、おそでも笑つて、

「あの時は私の虫の居所が悪かつたの。およねの奴もいやに突掛つて来るんですもの。……それは昨夕のような見つともない姉妹喧嘩なぞ止した方がいいんですけれどもね。でも、私時々は陽気な遊びをしたいと思うことがあるんだから、今夜は俊一の処で、皆なで何か賑かなことをして遊ぼうじやありませんか、俊一だつて喜ぶでしよ

うよ」

「それもいいだろう。だが、俊一の喜びそうな遊びは何だろう？ あの子が心から嬉しそうな顔をするのを、おれは一度でも見たいと思ってるんだけど、駄目だな」

「そう思うのはあなたの気のせいなのよ。俊一の身体はいくら不自由だっても、他人ひとが面白いと思ってることはあの子にも面白いんです。嬉しくってたまらないっていうようにニコニコしてることがあるのに、あなたは感じないんですかね。あなたよりも私の方が俊一の気持をよく知ってるんですよ」

ブラブラ歩いているうちに、土産物の重みで手がだるくなった。電車の線路を横切って狭い道を浜の方へ進むと、松葉杖をついた俊一の後姿がふと二人の目に映った。「俊ちゃん」と、おそではあたりを憚らず、大きな声で呼掛けた。

まん丸い顔をした看護婦の上田が、足を留めて振返って会釈すると、俊一も重い足を留めてニヤリと笑った。「今病院へ行って来ましたのよ」と、上田は夫婦の近づくのを待って云って、一しよに家の方へ向った。「今日は元気がよさそうね。血色もいくらかよくなった

し」と、おそではいつも会うたびに云うようなことを云って俊一に寄添って、鼻の尖った目のドンヨリした痩せた顔を覗いて見ながら、彼れの身体中を舐なめつく尽したいような情火に燃えていた。彼れの腰のまわりは、骨膜炎のため蜂の巣のように穴があいていて、そこには、一日として医者の手当てを怠ってはいられないほどに多量の膿うみが溜るのであったが、おそでは出来るものなら、俊一の骨をも肉をも腐らせているそういう膿を、自分の唇で吸取ってやりたかった。

夫妻は俊一を中心に挟んで何か話しながらトボトボと

歩いた。

僅かに三室みましかない小さな別荘で、間に合せの安普請なのだが。病弱な子供を本位として造られていて、風通しも日当りもよかった。寝台を据付けて、そこから寝ながらガラス越しに庭や松林が見えるようになっていた。庭には小さな池がつくられて、夏は金魚などを飼ったり水遊びが出来るようになっていた。庭木戸から出ると、海は直ぐ近くなので、波の音はよく聞えて来たが、俊一は毎日の病院通い以外には、戸外そとへ出ることを好まなか

った。退屈な思いをしている看護婦が、自分が遊びに行きたいために、屢々俊一を^{そその}唆かすので、彼れは子供心にも断つてばかりいては悪いような気がして、三度に一度は誘いに応じていたが、自分から進んで、活動写真を見たいとも海を見たいとも言い出したことはなかった。庭にブランコが備えつけられてあったが、それは近所の子供に利用されるか、時としては、看護婦と近所にいる若い学生との遊び道具に用いられるばかりであった。彼れは寝台^{ねだい}に横わっていない時には、日当りのいい障子の側に、火箸のように細い、青白い足を投出して、冬にな

つても残っている蠅の動くのを見たり、木立の多い隣の庭へ朝から晩まで来ては鳴いているいろいな小鳥の声を聞いたりした。あるいは絵本を見ることもあった。看護婦がおりおり聴かせて呉れる昔噺や怪談や人情話にも耳を傾けた。学校へは一度も行ったことのない彼れも、いつとなしに文字を習いたくなくなって、此方へ来てからは、看護婦が新聞や雑誌などによって教えて呉れる文字を熱心に覚えようとした。

ある時、彼れは母親が送ってくれた子供の雑誌を開けて見ているうちに、「ねていてころんだためしはない」

という文句を、自分ひとりで読み得たのが嬉しくって、
屢々それを口に出した。

「うまいことを云ってるわね。全くその通りだわ。俊ち
やんのように何もしないで、家の中で寝てばかりいるの
が、間違いがなくなってるいいんですね」と云って、看護婦
は欠伸あくび凌ぎに小唄を唄うのと同じ調子で「ねていてころ
んだ」を繰返した。おりおり遊びに来る分松葉わけまつばの抱えの
三子さんこにも「俊ちゃんの名言」として吹聴した。

上田にでも三子にでもおりおりからか揶揄からかわれるのが、腰部
の痛みと同じように俊一の心に痛く響くのであった。彼

れは声を揚げて泣くことはなかつたが、どうかすると、うな垂れて萎しおれていることがあつた。ふと癩癩を起して絵本を破つたり玩具を壊したりすることもあつたが、元氣な子供のようにあばれだす力はないのだし、顔付も薄弱に出来ているのだから、その癩癩も傍の者を驚かすには足らなかつた。

今日は日が温かかつたし、医者の手当てを受けたあとだつたので、俊一の機嫌もよかつた。土産の玩具のうちでは、天狗の面を喜んで、それを自分の寝台のそばに懸けた。「買った時にはこんなものは仕様があるまいと思

ったのだが、こうやって見ると、成るほど面白いね。しかしお前は夜こんなものを見て怖くはないか」と長吉が訊くと、

「怖いものか。僕はこんな真赤い顔が好きだ」と、俊一は答えた。

「へえ、お前は赤いものが好きなの？ はじめて聞いたわね」と、おそでは俊一の好みの一つをはじめて発見したように喜んだ。

彼女は東京の家にいる時とはちがって、此方では、気持よく台所働きをして、新しい魚を材料に二三品の料理

を注意して拵えて、四人で食卓ちやぶだいを囲んだ。銚子もつけて、彼女自身も久振りちよこで猪口を手にした。酒をうまいとは思わないのだが、昔やけ自棄飲けみをした癖が残っているので、飲むとなると随分飲めた。「お母さんの顔はあの天狗様のようになつたらう。女が真ッ赤い顔しちや見つともないけれどね」と云つたりして、酔うほどに飲んだ。長吉も不断より快く余分に飲んで、上田にも勧めて、無理強じいに二三杯猪口を重ねさせた。ただ一人青白い顔をしている俊一は、みんなの顔が紅味を帯びて来るのを不思議に思いながら見廻していた。

「此間うちは寒う御座いましたから俊ちゃんは何処へもいらっしやらなかつたのです」と云つて、上田は公園の梅が咲きかけたという噂を伝えた。

「じゃ、明日はみんなで梅見にでも出掛けましようね」と、おそでは調子づいて云つたが、するとふと片足の短い俊一の松葉杖突いた姿に衆人の意地悪い目が注がれる有様が思出されたので、人目の多い処へ遊びに出掛ける興味は薄らいでしまった。親子だけで、人通りの少い淋しい浜辺か野良の方を選んで散歩したかった。それよりも今夜のように家中に閉籠つて、傍に気兼ねしないで遊

んでいる方が却ってましなのかも知れないと思われたりした。

「俊一は今何処か行つて見たいと思つてる処があるの？　公園へは行きたいの？　箱根の山へでも登つて見たかあないの？」と訊くと、俊一は首を振つた。

「僕は船に乗つてみたいな。艀が押せるといいんだけど、僕は駄目だろうな」

「だって海は危いじゃないの。この辺の海は荒いから船がひっくり返つたら助かりやしないよ。お前は船に乗つたことがないから、珍らしいもののように思うんだね。」

それなら、もつと身体がよくなつてから汽船に乗せて上げようよ。みんなで房州へでも行きましよう……。ねえ、お父さん」と云つて、おそでは、長吉が悲しそうな眼付で俊一を見詰めているのを顧みて、「この頃、お父さんはお酒を召上ると、却つて沈んじやつていけない、今夜は羽目を外して賑かに遊ぼうつて、あなたも約束しなすつたじゃないの。俊一の氣に入りそうな遊びつて何だろうね」と云つて、看護婦の方へ向いて、「上田さんは、いろいろな流行唄はやりうたを知つてらつしやるから、唄つて聞かせて頂戴ね。私なぞ、長いこと、寄席へも浅草へも行つ

たことがないから、当節の唄は些ちつとも知らないのよ。いつだったか、雨がシヨボシヨボ降っていた日に、あなたは井戸端で洗物しながら唄ってらしたわね。雨は降る降る城ヶ島の磯につて。声がいいから、私聞惚れていたんですよ。私など喉が干枯びちやって駄目なんだけど、あなたは病気がないし、歳が若いから、声もいいんですね」

「唄でも何でも、上田さんに隠し芸があるんなら、一つやって貰いたいもんだね」長吉はいくら酔っても、今夜は妻子の顔をみるにつけて起って来る鬱陶しい思いを、

搔散らそうとして、お世辞でなしにそう云った。

「私は無芸大食だから駄目ですわ。奥さんのを一度聴かせて頂きたいって、三子さんこさんによくそう云っているんですよ」

「私は何をしててもカラツ下手べたなの。若い時分には逆立歩さかだちあるきはちよつと上手だったのだけど、この歳でそんな真似は出来ないわね」

おそではふと興こよりに乗って、汽車で見た剽軽ひょうきんな遊びの真似をした。紙捻こよりをつくって額こに載せて、仰向すべけた平顔をゆすぶりゆすぶり唇のところまですべ込らせて、「うまく

行つたわね。あなたもやつて御覧なさい」と左右を見た。俊一は面白がつてニヤリと笑つたが。長吉は何を馬鹿なと云つたような苦笑いした。

「サア、やつて御覧なさい」と、おそでが上田の額へ紙捻を押付けると、上田は半ばお義理に真似て見たが、自分で笑つてばかりいて熱心が足らなかつたので、二三度やり直しても、いつも鼻のところから横へ落ちた。同じ平顔でも、艶のある頬の肉を微動させながら、紅い下唇を突き出して、接吻をでも待受けているような上田の動作は、長吉の目についた。俊一は上田のしくじりを更に

面白がって笑った。

「サア、あなたもやって御覧なさいな。俊一が面白がってるじゃありませんか」

おそでは夫にも迫った。長吉は妻や看護婦の頬で撫でられ、唇で濡らされた紙捻を額に載せて、同じように道化た真似をした。俊一はますます面白そうに、声を立てて笑ったが、「お前もやって御覧」と母親に勧められると、いやだと首を振って後退しりごみした。

「極りが悪いの？ だって、此処にはお父さんとお母さんとみんなお前の好きな人ばかりいるのじゃないの。遠

慮することはありやしないよ。どんな悪戯いたずらをしてもいいんだよ。思い切り暴れて御覧なさい。誰れも叱りやしないから。……お母さんは俊ちゃんと一しよに暴れてもいいんです」

「お前に暴れられちゃ堪らないね」と、長吉は戯談らしく云ったが、心の中では本当にそう思っていた。喜怒哀楽の昂進した時のおそでの挙動の物狂おしさを、彼れは危かしがっていたのであった。「俊一はお父さんの髪を梳すいてお呉れ。以前は髪梳きが好きだったのに、この頃はいやになったのかい」と云って、綺麗に分けてある自分

の長い髪をわざと手で搔乱して、頭を前へ突出したが、俊一は母親の渡した櫛を手に取り、ことさえしなかった。

「床屋さんはもう廃業したのね。お父さんの髪の毛は長くって煩さいから、はさみ鋏でチヨキチヨキと切って上げればいいのに。俊ちゃんが切るのなら、お父さんだって怒んなさりやしないよ」とおそでは、不断看護婦が繃帯や膏藥など切るのに用いていたはさみ剪刀を引寄せて、自分で毛を切る真似をして見せた。

「そいつは御免だ」と、長吉が頭を引込めると、「いいじゃないの。俊ちゃんの慰みに切らせておやんな

さい」と云って、おそでは俊一を嗾けしかけた。

「切らせたきやお前の髪でも切らせるさ」

「よ御座んすとも、罪ほろぼしにいつか切ろうと思つたこともあるんだから」

「俊一はお父さんやお母さんの髪を切つたつても、首を斬つたつても、幸福しあわせにも楽しみにもなりやしないね。サアお父さんのところへお出で。絵本を読んで聞かせてやろう」と云って、長吉は危険な剪刀は妻の手から取つて、後の方へやって、俊一を招いたが、俊一は萎れた顔をして大儀そうにして、坐つた処を動かなかつた。

夫婦が戯れるにしても争うにしても、上田は傍で見ているのを快しとしないので、湯に行くと言つて出支度をした。

「どうせ明日はお風呂を立てさせるよ」とおそでは云つたが、上田は買物をして来ると云つて外へ出た。

「あの人はよく辛抱して呉れるけれど、他人は他人だから、やはり気が置けていけない。親子三人でこうして暮らしていられたら、私迷わないでいるんだけど、駄目ねえ」と、おそでは真面目になつて歎息した。

「だからお前が思切つて此方に居つくことにしたらいい

じゃないか。おれは下宿住いでも我慢すると云ってるんだから。そうすれば看護婦の高い給金だけでも助かるんだから、お前の収入がなくなっても、どうにかやっ行ってけんことはないだろう」と、長吉も真面目に云った。

「そりや、私にだって、繃帯の掛け方ぐらいは分らないことないから、看護婦まかせにして置くよりは、私が終始側についていた方が、俊一の身体のためにもいいに違いないんです。だけど、私は一銭の稼ぎも出来なくなつてあなたの収入ばかりを当てにするようになつちや、心細いんですもの。あなただって下宿生活を平気だなんて

今こそ云っていらっしやるけど、長くは辛抱が出来やしませんよ」

「なに、おれは辛抱して見せるよ。それにおれ一人だったら、一週に二度ぐらいは此方へ泊りに来られるだろう」

「私を俊一の側へつけといて、あなたは東京で一人で暮らしてた方がいいと思っていらっしやるの？　此間からの話の様子ではどうもそうらしいわね」

おそでは、一刻も俊一を離れてはいられないと思詰めるたびに、自分の職業などは拋出して小田原に定住する気になるのであったが、自分の目の届かなくなったあと

の夫の身持が疑われるので、それも極めかねた。近年夫はどんな女ともかかりあ関係いをつけてはいないらしいけれど、機会さえあつたら誰れにでも手を出しそうな様子が見えているのだから、少しでも油断は出来やしないと、彼女の猜疑の目は、留守番と台所の手伝いのために同居している妹のおよねの上にさえ及んでいた。

「お前が此方へ来たいのなら、そうしようと言つたまでじゃないか」と、長吉は話を外そうとしたが、おそではこの頃の癖で、いやにこだわって来だした。

「俊ちゃん、お父さんはね、お前やお母さんを何時棄て

て、他所よそへ行つちまうかも知れないんだよ。だけど、心配しないでおいで。お母さんは大丈夫、俊ちゃんを離れやしないよ。どんなに貧乏しても、二人で仲よく暮らしましょうね」

おそではそう云つて、俊一を抱締めて頬擦りしたが、俊一が悲しそうな顔を見ると、彼女も涙を落して、夫に棄てられたあとの母子の境涯を想像しては悲みに耽ふけった。

「下らないことを云うものじゃないよ」長吉は妻のいやみな泣っ面を見ると、酒の酔いも醒めるように感じながら、「俊一は此方へおいで。お父さんが面白いお話を聞

かせて上げようね」と、両手を差延べて、俊一の細っこい身体をぐっと引寄せようとしたが、おそでは、取られないとしてますますだき締めるので、俊一は出抜けに「いたいよいたいよ」と叫んで泣き出した。そして驚いた二人が手を離すと、彼れは力もなく横に倒れた。

やがて俊一が機嫌を直したころには、さつき峻けわしくなりかかっていた夫婦の心も和やわらいで、三人は火鉢を囲んで、甘栗など食べながら邪気のない笑い話に耽った。昨は何をたべたか一昨日は何をたべたか、この頃は夜よく眠られるかというようなことを、おそでは俊一に訊ねた

が、上田が側にいないのを幸いに、彼女の日常の行為をも彼れから訊こうとした。

「上田さんは笠間さんと箱根へ行く約束をしとったよ」と、俊一は先日耳に留めたことを話した。

「××にいる書生さんとかい……。今度の人は親切でよく辛抱して呉れると思っていたけれど、じゃ、あの人もそろそろいや気がさして来たのだね」

「上田と笠間という人との仲が怪しいのかい」と、長吉は横から口を出した。

「それは極まっていますさ。私は大分前から感づいてい

たんです。そんなことはどうでもいいんだけど、あの人
が行つちまうと、また代りを探さなければならぬから、
苦になるんです」

「どうでもいいってことはないよ。お前は何とも思つて
いないようだけれど、若い男と女とが巫山ふざけ戯た話なぞし
ているのを俊一に聞かせるのはよくないよ」

「それは構わないじゃないの。この前の人もああだった
し、どうせ若い人を頼めば、そのくらいなことは大目に
見ていなきや駄目ですよ。看護婦が色男をこしらえたか
らって、あなたが嫉妬やきもちやかなくつてもいいのよ」おそで

はツケツケ夫をやっつけて、俊一には柔しく、「それで笠間さんはこの頃は毎日やって来るの？」

「時々遊びに来るの。縁側へ腰をかけて話をするんだけど、僕は側へ行かんようにしてるんだ。昨日はお菓子を持って来て、僕にもたべろって云ったけれどね、僕行かなかったの」

「なぜ？　笠間さんは活澆ない人じゃないの」

「でも、僕はあの人好きじゃないよ」

「笠間さんがお前の気に入らないことを云ったのかい。お前は何でもよく分るからね」

俊一は自分の病気について侮辱的な言葉を笠間が云ったことをよく覚えていたが、それを両親の前に打明けては悪いような気がしたので黙っていた。

「俊ちゃんは今頃も上田さんは好きなのだろう。あの人のすることと気に入らないことがあって？　こういうところがいけないと思ってることがあるのなら隠さないでお母さんに仰おっしや有あいよ」

「そんなことない」

「お前は上田さんが好きなのね。この前の人よりも」

俊一が首肯うなずくのを見て、長吉が、

「じゃ、少々給料を増してもいいから、もっといて貰うようにするんだな」と云うと、

「六十円だって特別なんですもの。この上出してたまるものですか」と、おそでは、はじめ高い謝礼を出渡った夫が、無造作にそう云うのを怪しんだ。

「でも、俊一の気に入ってるのなら、少々の金は惜まないで、引留めといたらいいじゃないか」

「それはそうだけど、お金さへ出しゃいてくれるとは限らないわ」おそではそう云って、置時計を見て、「俊ちゃんはまだ寝んねしなきゃならないでしょう。今夜はお

母さんが寝かして上げようね」と、俊一に寝支度をさせて、十歳にもなる男の子としては軽過ぎる身体を横抱きにして、寝台の上へ運んだ。柔かい夜具をふわりと掛けてやって、おとなしく目を閉じた俊一の細そりした顔を暫らく見下ろした。

言葉が止切れると、東京とはちがった周囲の寂しさが二人の心にしみ入った。長吉は食卓の上に頬杖を突いて煙草を吸いながら、寝台の方へ目をやっていたが、おそでの身体が邪魔になって、俊一の寝姿は見られなかった。都会の濁った空気の中には健康が長く保たれないと

いう医師の注意によつて、一人子をこの海岸に住わせることになつたのも、今になつて見れば、一時の気休めに過ぎなかつたことが分るにつけて、自分たち親子三人の身は暗い闇に鎖されているように思われてならなかつた。そして、近年夫妻が、こんな不具な児を生んだ罪亡ぼしのために心を合わせていたのが、昨今はお互いの心に隙間が出来て来たので、大切な一人子の始末が長吉には言いようのない煩いになつて来た。

「俊一さえ生まれていなかつたら、こんな愚な女とはとつくの昔に別れている。三十を過ぎたばかりで生気を失

って末枯れた顔や肉体をしているような女を、男盛りの自分が、後生大事に守っているにはあたらなかつたのだ。それも俊一が人並に健かになる望みがあるのなら、それだけを楽しみにして、外の事には目を瞑つぶつていてもいいのだが、どうせ望みはないに極まっている」と思うと、いろんな苦勞に堪える張合いがなかつた。

彼れは寢台の側に立っているおそでの後姿を見ながら、せめて彼女を此方に定住させて、自分一人東京で気儘な下宿生活をするようにでもなつたらと望んでいた。上田が俊一の氣に入っているのなら、おそではどうなる

うとも、そういう女に俊一の短い一生の介抱を頼むことにしたらいいと、おそでの亡くなったあとを空想したりした。そんなことを空想するにつれて、若い学生と上田との関係が不快に感ぜられだした。

「俊一はもう寝つきましたよ」と、おそでが火鉢の側へ戻って坐ったところへ、看護婦も帰って来た。湯上りで一層艶々している上田の若い顔は、今度は不思議に長吉の目を惹いた。

「あなたも毎晩淋しいでしょうね。波の音ばかり聞えて」と、おそでが云うと、

「それでも御座いませんわ。この頃は私もスツカリ小田原に馴れたんですね」と、上田は爽かな声で応えて、「今三子さんに会いましたのよ。出抜けに後から私の目を圧おさえてお酒臭い息を吹き掛けるから、私吃驚びっくりしました。あの人は気さくでいつも面白そうですのね。明日は此方へお伺いすると云ってました」

長吉は、妻が若い芸者など相手にして、得意になって自分の昔を語ったりするのを好まなかったが、でも、三子の快活な気質、太り肉じしの健かな若い身体に対しては不快な感じを寄せる訳に行かなかった。

翌日もあたたかい日であった。俊一は誰れよりも早く目をさまして、雨戸の隙間から差して来る朝の光で天狗の面を見たり、窓際へ来て鳴いている小鳥の声を聞いたりしていたが、昨夕は不断よりもよく寝れたために何が嬉しいともなく、ひとりで微笑ほほえまれた。先日上田さんが笠間さんに、「あの子はいくら手を掛けたってどうせ駄目なんです。一度風邪を引いても、それでおしまいなんです。何も知らないんだから可哀そうですよ」と小声で云っていたのを、自分のことを話しているのだと、俊一

は耳に留めていて、今もその言葉を思出したが、その言葉は少しも彼れを悲しませはしなかった。父や母が傍にいて呉れるのは何よりも嬉しくって、時々来て呉れるのが待たれてはいたが自分が両親に随いて東京へ帰りたいたいとも思っていなかった。

炊事でも洗濯でも、すべての雑用を足して呉れる隣家の主婦が、台所口から声を掛けると。おそでは目を醒まして、「今日は朝からお風呂を立てますから水を汲んで下さいね」と、寢床から云った。

東京のゴミゴミした処で働いている夫妻は、雨戸を開

けて田舎の朝の空気に触れると、日頃の疲れが拭われて
しまふほどの快さを覚えた。長吉は朝餐あさめしの支度の出来る
間浜辺を散歩することにした。日はよく照って風もない
ので、沙すなの上に蹲しゃがんで大海を見渡していたが、すると、
そこへ笠間がやって来て、顔を見合せると、先方から挨拶した。

「お散歩ですか」と云って、相手の顔をよく見ると、以前と違って血色がよくなって頬に肉もついているので、「大変お丈夫になりましたね」と云うと、

「ええ、身体はスツカリよくなりました。月が變って温

かになつたら、此方を引上げようと思つています」と、笠間は元気よく云つて、目礼して行過ぎた。

「彼奴、おそでや上田にはよくお喋舌してるくせに、おれを煙たがつてあんまり話をしたからない」

長吉はそう思いながら、笠間の方を見やっていたが、健かになつて東京へ歸つて行く笠間の幸福を思うにつけて俊一の事が新そなにいたましく胸に迫つて来た。そして、同じ人間の形を具そなえて生れて来ながら、俊一のみが悲惨な生存を続けねばならないのを、考えれば考えるほど諦めかねた。

で、家へ帰って、

「笠問さんは肺病が根治したのだろうか。見たところは、大変達者そうになってるね」と、誰れに云うともなく云うと、

「海岸でお会いになって？」と、上田は訊ねて、「あの方はこの頃は、病氣しない前よりも強くなったから寒い日にでも海岸を運動していらっしやるんですって」と、手拭を姉様かぶりにして、障子に^{はたき}払塵をかけながら云った。

「難病が癒ったあとは格別に悦^{うれ}しいものでしょうね。肺

病のような病気でも養生次第で完全に癒るんですかね」
「あの方も一時は絶望していらしたんですって。だから、これからは生命びろいをした気で勉強するのだと云っていらつしやるんですよ」

笠間の生国しよこくや通っていた学校について、二人が訊ねたり答えたりしている間、おそでは側にいながら口出しないで浮かかない顔をしていたので、長吉が気にして、言葉を掛けると、

「さつき上田さんのお手伝いをして、俊一の繃帯を取替えたのですけどね。それはひどくなってるの……」と、

おそでは萎しおれて云ったが、その顔は不断よりも一層婆さん染みていた。「以前よりももつとひどいんです。五つも六つもの穴がべったり膿でふさがっていて、ガーゼを通すと、穴の中は横の方まで空虚になっていて、此方からあっちへガーゼが通るんですもの。まるで田舎のおへつつい竈見たいに、口は別々になっても、奥は一しよに穴が開いてるんじゃないやありませんか。あなたも一度よく見ておやんなさい」

「それはおれも医者からよく聞いているよ」
長吉は、今更云わなくつてもいいことを妻が口に出す

のを苦々しく思いながら顔を顰しかめた。

「聞いただけでは駄目ですよ。病氣の本元をよく見なければ」

「おれは医者じゃないし、見たって為方しかたがないじゃないか」

「顔だけ見ると、俊一も次第に丈夫そうになっているから、あなたは平気でいられるんです」

そう云って夫の冷淡を攻めだしたおそでも、平生は俊一の患部を熟視することを恐れて、看護婦の手伝いをする時でも、成るべく目を外らすようにしていたのであつ

たが、今朝は、事によつたら今後自分一人で病児の世話をしなければならぬと覚悟して、勇気を出して、日々の手当ての仕方を看護婦に教わつた。そして、地獄をのぞいたような戦慄を覚えたのであつた。

掃除を済まして、不断は乱雑になつてゐる家の中を綺麗に取片付けて、四人揃つて遅い朝食の膳に向つたが、夫妻は気持よく食物を味うことが出来なかつた。風呂が沸くと、長吉が入つたあとで、おそでは俊一の身体を拭つてやつて、障りのない処を丹念に磨いてやつた。手の指先や手首などを、石鹼シヤボンや垢磨あかすりを用いていじり廻してい

ると、俊一はおとなしく、愛撫に依って受ける快感を楽しんでいるようにニコついた。湯の温かみで彼れの青い皮膚にも、人間らしい艶が出て、頬にも紅味が差した。

「俊ちゃんの身体にはこれだけの元気があるんだから、いい空気を吸っておいしい物をたべて養生していれば、次第に丈夫になるんですよ。そう心配することないの」と云って、おそでは急にまた希望を回復して、自分の心を慰めた。

夫婦が案じていたように、看護婦が暇を呉れよと申出はしなかったし、隣家の主婦の給金や家の費用も滞りな

く支払うことが出来たし、子供を相手に一日遊び暮らし
て、夜の汽車で二人一しよに帰りさえすれば、例の通り
なのであったが、午過ぎに留守居のおよねから、盗難に
会ったという意外な電報が来たので、二人は吃驚びっくりして顔
の色を変えた。

「戸締りをよくしなかつたんだらう。家を空けて遊びに
出ていたのかも知れない」と、おそでは妹の不注意を憤
って、側にいたら殴りつけてでもやりたいたいように昂奮し
たが、衣類持物のすべてを盗まれてしまったような気が
するとともにドンヨリした萎れた両眼に涙が浮んだ。

「大切な物をみんな盗まれてしまったら、これからどうするんですよ。今日が日から着のみ着のまままで路頭に迷わなきやならないじやありませんか」

「そう慌てなくつてもいいよ……しかし、電報が来たのだから直ぐ帰らなきやなるまいな」長吉は努めて落着いて云ったが、この頃自分の心の内や外に微見^{ほのみ}えかかっていた悪運のおとずれが、この盗難を最初として続々起つて来るのではないかと恐ろしく感じた。

「なに、家じゅう探したって碌な物はないんですよ」と、強いて笑いを浮べて、看護婦の慰問に答えて、おそ

でを促して歸支度に取り掛った。いくら急いだって、汽車の中で二時間あまりもじっとしていなければならぬと思ふと、二人はもどかしくてならなかつた。

「お母さんは四五日したらまた来ますからね。上田さんの云うことをよく聞いて、おとなしくしていらつしやいよ」と、おそでは俊一に別れを告げたが、俊一はいつもの通りで、ちよつと寂しい顔をしたばかりで、さして別れづらい様子を見せなかつた。

「俊ちゃんをお頼みますよ」

「じゃ、お大事に」

上田は、戸口でいつもの通りの挨拶を取りかわして、二人がアタフタと出て行くのを見送ったあとで、家の中へ戻ったが、盗難の話が聞かされたために、病児と自分との二人生活が俄かに心細く思われだした。

「俊ちゃん、あなた怖くない？ 東京のお家のように此処へ泥棒が入ったら困るわね」と云うと、
「そうしたら何でも持って行かせればいいでしょう」と、俊一は事もなげに云った。

「泥棒って、ただ物を取って行くばかりじゃないのよ」「じゃ、どうするの？」

「刃物で斬ったり突いたりするかも知れないの。刃物を振廻されたりしたら、あなただつて怖いでしょう。私今夜から此処で寝るのが怖くなつてよ」

「じゃ。あなたも東京へ帰つちまうの？」

「帰りたくつても、あなたを一人此処へ打ちやらかしていて帰りやしないわ」上田は、ふとこの病児を不憫ふびんに思つてそう云つて、「俊ちゃんはこの頃は東京へ帰りたかないですか。たまにはお母さんに随いて帰んなさればいいのに」

「帰りたい時にはいつでもそう云つてやればお母さんが

迎えに来て呉れるんだからいい」

「お母さんが大事なひとり息子を田舎へ打ちやらかして置くのも不思議だけれど、あなたが孤児見たいにこんな処に一人ぽっちにされて、そう淋しいとも思わないのは私不思議でならないわ。親子の仲はそんな筈ないと思うんだけど。……」

そう云われると、俊一も母親の懐かしい思いが胸に迫って来たが、口へは出さなかった。そして、自分で寝台の方へ行って横になった。仰向けに寝たまま目をパツチリ開けて、低い天井を見ながら、窓外の物音に耳を留め

ていたが、其処では近所の子供が囂やかましい声を立てて遊んでいた。俊一には言葉がよく聞き取れなかったが、時々は煩うるさく感ぜられる子供等の騒ぎも、今日は心の慰みと なった。彼れは障子を開けて、彼等の活澆な挙動を見下したりした。四人も五人もの子供が、向いの危あぶなかしい石垣の上に登って、互いに他を突き落そうとし合っていた。拍子を取って勢よく飛下りる者もあつたが、飛びおりて平気で地上に立つのが、俊一の目には不思議なこととして映った。彼れは誰れの足にも腰にも怪我のないのを不思議がった。そういう騒ぎの間に、小鳥が隣の樹木

から自由に此方へ飛んで来るのを、彼れの目は見のがさなかつた。

俊一が外へ心を惹かれている間に、上田は縁側で日向ぼっこをしながら、朝のうち読みそこなつた新聞を読んでいたが、そこへ三子が湯屋の帰り途に立寄つた。髪をハイカラに結っていて、面長な引締つた顔立も、中流の奥様らしいがベタペタしたような歩きつ振りが、どうしても田舎の芸者か酌婦見たいで本性をあらわしていた。「あの人は顔ばっかりお上品らしくしようとしているけど、胴から下がだらしが無い」と、おそでが上田に云つ

たことがあった。

上田はいい話相手として迎えて、夫婦が例よりも早目に帰京した訳を話した。姉さんには是非聞いて貰いたいことがあったのに惜いことをしたと、三子は大袈裟に云って、

「此方の御別荘へ、有りつたけのお金をつぎ込んで、箆の中も金庫の中も空っぽだなんて云ってたけれど、泥棒に取られるような物が有るんですかね」と、冷かすような口調で云ったが。「でも、お気の毒ね。たまに俊ちゃんに会いに来なすつたのに」と、同情した表情をして、

寝台の方を覗いて、「俊ちゃん、寝ていらっしやるの？」と声を掛けた。

俊一は振返って微笑したが、直ぐに寝床に横わって、二人の方から顔を背向けた。「あなたのお母さんはあなたの生まれる前には三子さんのようだったのよ」と、かねて上田から聞かされていたのだが、彼れはそのため、却って三子に親しみがなくなっていた。

「私この頃思い余ってることがあって、姉さんの智慧を借りたいと思っていたのよ。姉さんがいないから上田さんに聞いて頂こうかしら」三子は馴々しくそう云って、

温まっていた肌の冷たくなるのをふと気遣って、障子を締め、火鉢の側へ寄って、「こういう家において、気儘に寝たり起きたりしていたらいいでしょうね」と、何かを考えているような目をしてあたりを見廻していた。

「淋しくって為し様ようがないわ。それに大切な病人を預かっているんだから油断は出来ないんですもの。私さつきから考えていたのよ。俊ちゃんびやくいの身体に極まりがついたら、私の白衣生活びやくいもおしまいにしようと思っていたのですけれど、それまで待っていられそうでないの」

「でも、もう少しの間でしようから、勤めてお上げなさ

いな。あなたならこそ、牛島さんも安心して俊ちゃんを任せていられるのよ」

これまでもおりおり話合っていたように、おそでが病児を打ちやっけて置いて、夫の側に喰付いているのを二人で非難して、口では何と云っていても、子供よりは御亭主の方が大切なのであろうかと、そういう実感を持っていない二人は、いろいろに当推量をし合ったが、話がそつちへ外れて、いやに真面目になりだすと、三子は最初話しかけた話を進めるのが後目うしろめたくなった。

「此方の主婦おかみさんは嫉妬深いのね。今度なぞ側で見てる

「いやになるんですよ」と、上田が云ったので。

「それは焼餅やきですとも。だから、私牛島さんには成るべく口を利かないようにしているのよ。あなたも気をつけてらっしゃい。詰らない疑いを受けちやいけないから」と、三子は応えて、「でも、上田さん、何よ」と調子づいて「男でも女でも、あんまり焼かなさ過ぎるのも張合いのないものよ。私の知ってる人の奥さんは、御主人が何をしても、本当に平気でいるらしいの」

「ケーさんて方でしょう。主婦さんに聞いてよく知ってますわよ」

「ケーさんでもコーさんでもいいから、上田さん親身で聞いて下さいね。……私、その人に月に三度ともしみじみ会やしないのよ。一年の余も喧嘩一つしないで照降てりふりなしに続いて来ているのだけど、その人のお腹の中が、私にはどうもよく呑込めないの。私の身をどうして呉れるんですよと、改まって一つ訊けばいいのだけど、それを口に出すのが怖いようで、何時会っても云われぬのよ。……私は前から気をつけていたから、大した借金は残っていないのでしよう。年末にも、浜の××屋だの此処の××からいろいろな反物を持って見せに来るし、家の姉

さんが傍から勧めるし、私も去年ので間に合わせるのは気が利かないから、浮うっかり手を出しかけたの。下着も欲しい、長襦袢も欲しい、帯も欲しい、今年やままゆは山繭はやが流行はやってるなんて、私だって、お正月には切立ての新しい物を身体につけたいには極まってる。だけどここが大事な所だと、私は考えちゃったの。まだ二年や三年稼ごとと思えば稼げなかないし、ちっとやそつとの借金でこの先が暗くなるってことはないのだけど。若しもあの人に心から私の身を引取って呉れる気があるのなら、私の方でも今のうちにその覚悟をして、あの人に成るべく

余計な迷惑を掛けないようにしなきやならないと思つて衣服のことなんぞ目を瞑つぶつて我慢したのよ。御覧なさい。私は指環さえ一つ持っていないのじやないの。私だつて以前は負けること嫌いな見栄坊だつたから、頭のものだつて、手足につけるものだつて、何処へ出ても恥かしくない物を、一身上持ひとしんしんしょうつていたのだけど、ある事のためくに、そういうものはみんな無くしたので。……年末れにあの人に会つた時に、お前はお正月の支度は出来たかと訊かれたから、そんなものはどうでもいいんですと、負借みを云うと、そうかつて、それつきりだつたの。見栄

坊の私が物はよくつても去年のお古を着てまがい珊瑚のかんざし簪なんぞ差して、見栄も外聞もかまわないで、お座敷へ出ているのは誰れのためだか何のためだか、あの人はよく知ってるくせに、とどの詰りの肝心なことを私の前で言い出さないのだから、私じれったくて仕様がな。先方でも私の方から言い出すのを待ってるのかも知れないけど、私どうしても思切って口には出せないのよ。家の事情でお前の一生を見てやる望みはないから、これまでの縁だと思ってくれと云われはしないかと、詰らないことが気になってならないの」三子はふと声に力を入れ

て、「全体あの人の奥さんが焼餅をやかないからいけないんだわ。騒いでくれれば、いいか悪いか、どちらかにキツパリ道がつくのだけれど、奥さんがおとなしいから、張合いがないったらない」と云って、「上田さん、あなたはどうお思いになって？」

「私には分らないわ」上田は相手の手放しの惚気のろけを座興として聞いていたのであったが、ふと自分の胸に思い当るところがあった。

「それで、その方があなたの一生を見てやると仰有ったらあなたはすぐにも今の稼業をお止めになるの？」

「そうよ。私今が丁度廃業にいい汐時だと思っているの。看板の空いたのがあるからって、私の気を引いて見る人もあるけれど、私気乗りがしないの」

「あなたの稼業は傍で思うほど面白かないんですかね」「私別段稼業をいやだって思やしないんですけどね。でも、好き好んで芸者なぞになるものじゃないわね。あなた方の御商売の方が尊いのよ」

「そうでもありませんよ。私もはじめは白衣生活にあこがれていたのですけれど、内輪に入って見るといやなことばかりなのですよ」上田はかねて見聞している内輪の

いやな事を話そうとしたが、相手に蔑視さげすまれるのが気になったので、話を転じて、「ケーさんとかはいくつにおなりなさるの？」

「牛島さんよりも一つか二つ上なんですよ。もうお爺さん」

「そう」

「変に思っっていらっしゃるのね。でも、男で本当に手頼りになるのは四十くらいな人なのよ。あなたは二十代の若い方が好きなんでしょう」

三子は平気でそう云ったが、上田はドギマギして返事

をしないうで目を伏せた。笠間のことを三子に知られてい
るのではないかと思うと、顔が火照^ほつて来て、向い合っ
ているのが堪えられなくなった。

「俊ちゃんはお私たちの話を聞いていたのね」と、三子は
目をパツチリ開けて此方を見詰めている俊一の方を顧み
て云ったので、上田はそれを幸いに、

「俊ちゃんはお医者さんへ行かなきゃなりませんね」と
云って座を立った。

上田は三子よりは却って三つ四つ年上であつたが、色

恋についての経験や知識は三子に及ばないと思っていたので、おりおり此処へ来ておそでや自分に向って、無遠慮にしやべり立てる彼女の話をいつも好奇心をもって面白く聴いていたのであった。今日は三子が帰ったあとで俊一を連れて病院へ往来する間に、三子の云ったことを思出していると、笠間に対する自分の気持がそれによく似ているのじゃないかと思われだした。お互いに心の中で思い合っている、どちらかが口へ出して云わないかぎりには、煮え切らない日がいっまでもつづくのだと、上田は笠間と自分との仲をそういうことに極めてしまっ

た。「でも、あの女はケーさんひとに一生を見て貰えるか貰えないかが分らないだけで、一年の余も関係は続いてい
るのだけれど、そこへ行くと、私たちの間は綺麗なもの
だ」と、自分の肉体の潔白を誇る気にもなったが、それ
をひそかに誇ったあとでは直ぐに、三子などのように自
由に自分の肉体をあつかい得られる境涯の人々の羨まし
さが力強く胸にわき立った。今までに二三度誘惑を斥け
て自分の潔白を守って来たことも、おそでなどに向って
口でこそ自慢げに吹聴したものの、真実は幸福を取逃し
た口惜しさが感ぜられていた。……そして、今差当って

自分をかまって呉れそうな男は、笠間の外には無いのに、その笠間も月が変わったら東京へ帰ってしまふのだと思うと、上田は愚図々々していられない気がした。

夜になると、平生の夜にまして淋しかった。退屈さまざまに、俊一に童話を一つ二つ読んで聞かせたが、気乗りがしなかったもので、いつものような親切な説明は附加えないで、書物を押やった。どうせ笠間は、近所の噂を憚って夜は遊びに来ないに極っている。誰れか話はなし応えのある人が訪ねて呉ればいいと、頻りと心待ちにされた。三子などは今時分、唄うたったり喋しゃべ舌べったり、いろんな男に

巫山ふざけ戯られたりしているのであるろうと想像すると妬ねたましくなつた。いくらか報酬がよくつて気楽であるために、病児を相手に浮々うかうかと幾ヶ月も過したことが後悔された。

「泥棒が来たらどうしようね、俊ちゃん」と、黙つてばかりいるのが堪えられなくなつて、独言ひとりごとでも云う気で、ふと話をしかけたが俊一が返事をしないので、「泥棒だつて、あなたをどうもしないだらうけれど、私はひどい目に会わされるかも知れないから、気味が悪いわ。笠間さんにでも泊つて貰うといいんだけれどね」

「そうしたらいいでしょう。僕、笠間さんが来たつて構

やしないよ」

「あの人は本当にいい人よ。あなたはそう思わない？」
俊一はあの人は嫌いだと云いかねて、ニヤリと笑った
だけであつたが、上田は独言を続ける気で、

「私笠間さんがこの家へ毎晩泊りに来てくれるといいと
思うのよ。あの人がってあんな汚らしい貸間に一人ぼつ
ちで寝ているよりや、此処へ泊りに来た方がいいにちが
いないのだけど、世の中は面倒くさいものね。俊ちゃん
も身体が丈夫でもっと歳を取ったら、屹度きつと好きな女の人
が出来るに違いないわ。あなたは今どんな女の人がいい

と思っていて？　三子さんのような人？　私のような人？」などと云いながら、俊一の側へ寄って、自分の顔を押し出して見せたが、俊一は返事はしないで微笑していた。三子や上田の若い艶のいい顔は、母親の顔とはちがった味いをもって、彼れにも感ぜられていたのであった。「あなたはお父さんに似て、顔立は悪かないのよ。病気のために血色が悪いから何だけれど、本当はいい男なの。鼻筋が通って面長でちよつと品がいいのね。鼻の恰好が笠間さんにも似ているのね」

上田はそう云って俊一の鼻を抓つまんでいじくって、彼れ

が後退あとずさりすると抱きかかえて頬ぺたをおつつけた。「私の鼻はあなたのはちがってペタンコでしょう」と、俊一の手を執って強いて彼女の鼻をいじらせた。毎日大小便の世話までしているので、俊一の肉体のどこに触れるのも珍らしいことではないし、いつも臭気のある汚い肉塊のように彼れを見倣していたのだったが、今夜はかつて感じなかった快感が感じられた。……空想の昂奮した今夜の彼女は鼻ばかりではなくって、俊一の肉体のどこをでも笠間の肉体であるように夢見た。俊一自身も彼女のくどい愛撫を避けるように身体を動かしながらも、彼

女に手放されたくない気持ちになっていた。

「さあお休みなさい」と、やがて、上田は俊一を寝台の上へそつと置いた。そして、火鉢の上で滾たぎっていた鉄瓶の湯を金盥かなだらにうつして、唇を拭い手を洗い、戸締りに気をつけて寢床に就いた。

今度牛島夫妻が来たら、何とか口実をつくって暇を貰うことにしようと、略ほぼき極めて、上田は四五日の間ソワソワして過した。その間に一二度笠間が縁側へ立寄ってくれたのだが、折悪く、隣の主婦が庭の掃除に来ていたの

で、通り一ぺんの笑い話を取りかわしたただけであった。

「今月一杯でいよいよ此方をお立ちになるの？」と訊くと、

「ええ、もういつでも立てるように準備が出来てるんです。僕のために送別会でもやって呉れませんか」と、笠間は云った。

「こんな土地にでも永くいらしったんだから、いよいよお別れとなると、思い残ることもあるでしょうね」

「そりやあるかも知れませんね」

「私も少し事情が出来て近々に東京へ帰ることになるか

も知れないんです」

「じゃ、僕と一しよに帰っちゃどうぞです」

「御迷惑じゃなくって？」

それから互いに^{からか}擲揄うような口を利き合ったのであったが、上田はあとでの思出に、笠間の心の底がまだ見極められないので^{もどか}牴牾しかつた。牴牾しさのあまりに、あたりが鎮まって、隣の主婦も来ていない夜には、病児を側へ引寄せては、惜気もなく、若い女の熱の籠ったキツスを、病児の肉体のあちらこちらへ与えた。こうして、病児が笠間と化してそこに寝ていると思うと、泥棒の恐

怖も自ら忘られた。

「×時の汽車で行く」という牛島夫妻の電報を見ると、上田は四五日以来の事を考えて、稍後目ややたい気持がした。早速鏡に向って粉飾おめかしをして、俊一の顔をもよく洗ってやって、時刻が来ると、外出をいやがる俊一を宥なだめ賺すかして、停車場へ連れて行った。途中で、「お母さんにいろんなお喋舌しゃべりしちやいけませんよ。よ御座んすか」と、いく度も言い聞かせたが、そのたびに、俊一は首肯うなずいた。

窓から顔を出してプラットホームを見ていた牛島夫妻は、汽車を下りると直ぐに、俊一のそばへ寄って行った

が、彼れの顔が、この前よりも著しく窶やつれて色が青褪あおざめて、目元や口端に漏らした笑いさえ凄あさましいようなのに驚いた。二人はこもごも上田に訊ききた糺ただしたが、上田は、

「別段お悪いってことないんです」と云って「暫らく家にばかりいらしたのに、久振りで此処までお歩きになったのでお疲れなすったのでしよう」

「じゃ、お迎えに来て貰もらわなきやよかったのにね」と云って、おそでは俊一を衆人の目から庇かばいながら停車場を出て、俵たわらを連ねて家へ行った。

いつものように土産は多かったが。俊一は嬉しい顔も

しなかった。

「先日あんな風に慌てて帰ったから、気になって、今度は早く様子を見に来たのよ」と云っておそでは、上田の問いに応じて盗難の話をした。……盗まれた物は二三点の衣類に過ぎなかったもので、留守居のおよねの身にも怪我はなかったのだから、夫妻は帰って見て安心したのだけれど、およねが恐れて、この後の留守居番を堅く断つたのに困った。で、いっそのこと、これを機会に、おそではある商店への通勤をよして、芝の家を片付けて、小田原に定住することにして、長吉は下宿住いをしようか

と、夫妻の間に話が略纏ほぼまりかけているのであった。

「そうなたら俊ちゃんのためにもよろしいんですね」と、上田が云うと、

「盗難も、弱い子供を打遣うつちやらかしといた天罰かも知れないのね。以後気をつけろって、何処かの神様か仏様かが泥棒になって私たちを戒めて下さったのかも知れませんが」と、おそでは此間から殊勝らしく感じていたことを云った。

盗難を神仏のお諭さとしのようにまで、おそでが祭上げるのは、長吉には可笑おかしかつたが、それを縁に生活変更の

覚悟を妻がしだしたのは、彼れの思う壺に嵌はまった訳なので、何よりも嬉しかった。それで、妻のその覚悟を弛ゆるめさせないようにと、此間から自分も真顔で盗難をあがめ奉っていた。

「お前が俊一の看護に一心になっていてくれれば、おれも安心して一生懸命に働かれるよ」と、屢々云って、母親の愛情によって子供の難病のよくなることを空想するとともに、彼自身の自由な生活の道が久振りで見ると、俊一は意外に衰えるのを空想していた。今来て見ると、俊一は意外に衰えていたが、上田はこれまでよりもなまめ艶かしいように、

彼れには思われた。

其後の病児の食事や睡眠などについて、夫妻は上田に訊糺して、変りはないと聞いて一時安心はしたが、俊一が例になく不機嫌に振舞って、取ってやった土産の西洋菓子を畳の上へ抛出したりするのを見ると、それが病気の重くなった為ではないかと疑われた。「氣持が悪いのかい」と、左右から訊ねたが、俊一は返事をしなかつた。で、不断のような陽気な遊びやお喋舌はおのずか自ら遠慮されて、しめやかな夜を過した。上田自身の希望でもあり、おそでも覚悟していたので、看護婦解雇の打合せも

された。

「私だって二三日身を入れて上田さんに教わったら、俊ちやんの看護や手当てが、間違いなしに出来ないことはありません。長い間人まかせにしている気になっていないのがいけなかつたのです」と、おそでは決心を強めて云った。そしてその夜は病児の眠りを守るように、寝台の直ぐ側へ自分の寝床をのべた。

俊一は寝支度をしている上田の方を見やって、彼女が昨夜や一昨日の夜とはちがって、きつい顔をしているのを不思議に思った。留守中の上田の所行をおりおり母親

に向つて打明けている彼れも、先日来の彼女の不思議な所行は誰れにも云つてはならないような気がしていたが、上田が東京へ帰りそんな話をさつき傍で聞いてからは、彼女に別れることが何となく悲しくつて、母親が代りに来てくれることもさして悦うれしくは思われなかつた。それに上田が笠間と一しよに帰るらしいことを考えると、不断から何となく好きでなかつた笠間が憎らしくさえ思われ出した。

「俊ちゃんは何で眠れないの？」真夜中にふと目を醒ましたおそでが、電気を点つけて、寝台を覗いて云うと、俊一は

目を瞑って夜具の中へ顔を引込めた。

「気分が悪くないの？」

背せなかが痛くないの？」

「どこも痛かないよ」と、俊一は力を入れて答えた。

「それだといいいけれど、夜中にでも気持が悪かったら、お母さんを起しなさいよ」

「ハイ」

俊一はキツパリ答えたが、母親が電気を消して寢床に就くと、再び目を開いて闇の中を見詰めた。遊び友達と云っては一人ももたないで育って来た彼れは、この土地へ来てから知合いになった隣の主婦やその子供や、三子

や笠間や、病院の医師や看護婦などの言語動作を耳目に
触れて、わずかに世の中を知っていたのであったが、み
んなが彼れを、「死にかかっている人間」「可哀そうな
人間」として取扱ったり噂をしたりしているのを、彼れ
はつねに胸に留めていて、自分は足が悪くって外の人の
ように飛んだり跳ねたりが出来ないのに、夢の中では
屢々外の人にもまさって飛べもし駆けられもされるのを
不思議に思っていた。そして、闇の中で目を開けている
と、誰れかが寝台の上へやって来て、自分を捉えて何処
か遠い処へ連れて行きはしないかと思われて、多少恐ろ

しかつたが、連れられて行つて見たい気もした。両親には平生ふだん離れているし、隣の主婦や三子や医師など、彼れの世の中のすべての人々の言語動作に懐かしみも親しみも寄せられないでいる彼れは、知らない誰れかに連れられて、遠い処へ行つても構うことはない、ひとりで覺悟を極めていた。むしろそうなることを待設けることさえあつた。今夜は闇の中で目を開けていると、ことにそう思われた。……波の音は不断よりも強く響いて来た。風が吹いて雨戸が音をたてた。今にも誰れかが寝台の側の窓の戸を開けて入つて来そうな気がして、俊一は顔を

そっちへ向けたが、そのまま知らず知らず浅い眠りに落ちた……再び目が醒めた時には、音のしていた雨戸の隙間は明るくなっていて、自分が同じ処に寝ているのを、彼れは知った。

寒い風が吹いて日差しも鈍かったので、夫妻は朝から火鉢に親しんで、内輪の暮らし向きの話に耽って、外へ出ようとはしなかったが、正午過ぎひるすに三子の訪ねて来る前触れがあると、長吉は彼女に会うことを嫌って、一人で寒さを冒して公園の梅を見に出掛けた。

おそでは三子の此間の話を上田から聞かされていた

が、今日はそういう浮ついた他人の事に関わり合って笑い興ずる気にはなれなかった。で、「姉さん」と三子が威勢のいい戸で呼び掛けて入って来ても、いつものように調子を合せて迎えはしなかった。盗難の事や夫婦別居の事など一通り話が運んだあとで、三子は、

「姉さんが小田原へ越していらっしやれば、私は相談相手が出来て心強くなるわね」と、喜んで、「それで、牛島さんは一週に一度ずつくらい此方へ泊りにいらっしやるの？」

「ええ、そう、……毎日一しよにいて喧嘩ばかりしてい

るよりや、その方が二人のためにもいいんですよ」

「姉さんも変ったわね」

「変ったって？ 何が変ったのさ。私が何年経っても亭主一人を後生大事に守って、一日だって放さないようにしてるって、あなた達は笑ったことがあったわね」

「……でも姉さんは可愛い俊ちゃんのために、旦那様と別々に暮らそうというのだから、結構なことだけれど、私を御覧なさいな。あの人に奥さんがあるために、いつまでも一しよになれないで愚図々々してるじゃありませんか」三子は忌々いまいましそうに云った。

「……私は本当の事は知らないけど、話にだけ聞いてみると、あなたは全く愚図々々ね。成っちゃいないわよ。早くどちらかに極めたらいいじゃないの？ あなたに腕があるのなら、ケーさんとかをうまく抱き込んで、奥さまで何さまでも、さっさと追抛おっぽりだ出させるようにしたらいいじゃないの？ どうせ芸者稼業しんしゃくをしているのに、お上品ぶって、世間の人に遠慮や斟酌しんしゃくをするには当らないのさ」おそでは自分の昔を顧みて、三子のような場合を想像しながら、ふと昂奮して云った。

「だけど、あの人のお腹の中が私には分らないんですも

の「三子は甘えた口調で、「それは私を可愛がって呉れるのですけど、私の一生の手頼りになって呉れるのだから呉れないのだから、それがハッキリ分らないの。姉さんだったらあのくらいな年輩の男の人の心がよく分るでしょうけど、私には見当がつかないのよ」

「歳を取った男はずるいからね。家の人だってそうですよ。……三ちゃんはケーさんにお金の迷惑も掛けないようににして慾も得も棄ててかかっているのに、その実意が先方へ通じなくっちゃ馬鹿らしいじゃないの？ いい加減あなたを釣っというて、いざとなったら背中を向けようっ

ていう腹なのかも知れないよ。当てにしなくて用心しなきゃいけないね」

「ケーさんは決してずるかないのよ。余計な嬉しがらせなんかは云わないのよ。……姉さん一度ケーさんに会って下さらない？」

「いやなことだね。お温かい所を見せつけられて溜るものじゃない」

「あら私真面目なのよ。……ケーさんの様子を通りがかりにでも、姉さんに見て貰いたい。姉さんなら、私なんぞとはちがって、一目見たら、あの人の価値が分るで

しよう」

そう云われると、おそでもうかと得意になつて、「全体ケーさんて云う人は何処の誰れだか、正体を明かして御覧な」

「姉さんが会つて呉れば明かしてもいいわ」と云つて、三子はおそでが首肯うなずくのを見ると、次の室にいて此方の話を耳に留めているらしい上田に遠慮しながら、畳の上を書いて見せた。そんなことではおそでがよく呑み込まないので、硯箱すずりばこを持って来て鼻紙に書いて、その人の家の道筋の図取りまでもした。

「小綺麗ないい家なのよ。奥さんが実家へ行っていた時に、私夜おそく庭木戸から忍んで行って、夜明頃まで泊ったことが一度あったの。夜中に私がくびきをかくと、ケーさんは私の耳を引張っちや起し起しするの」

「じょうだん戯談じゃないよ」おそでは睨みつける真似をした。鼻紙に書かれている名前は見るか聞かかしているような気がした。

「私姉さんにはまだ秘密で話したいことがあるのよ。姉さんにうしろだて後楯になつて貰つて一仕事して見たいことがあるんですよ。一日箱根へでも行ってゆっくり相談したい

んだけど、姉さんは一人じゃ出られないかしら。旅費は私の分は私が出してもいいわ」

「箱根へでも何処へでもそのうち行ってもいいけれど、当分は駄目らしいの。それよりも私一度この土地のお茶屋で遊んで見たいよ。お金が出来たら、三ちゃんの家の人をみんな××へでも呼んで御馳走したいと思ってるんだけど、こんなに貧乏ばかりしていちや駄目ね」

「お止しなさいよ、そんな無駄なことは。……それよりも、姉さんは此方へ越していらっしやることに極きまったら、此方で一商売はじめなすっちやどう？ 私いいこと

を思いついてるのよ」

「相談ってそのことなの？　あなたの思ってること大抵は察しがついてるさ」

おそでは意味ありげな笑いを浮べた。上田を憚って明らかさまに口へは出さなかつたが、三子がかねて他事よそごとのようにな話していたことを思出して、「叔父さんのお店のよくな爺むさい商売のお手伝いは、私の性には合わないのだからね。俊一に手が掛らなければ、もっと面白い稼ぎをして見たいのさ」と、ふと心が浮き浮きした。色気のある社会には、牛島が好まないために、長い間遠ざかつ

ているし、芸者屋だの料理屋だのを営むには、いい手蔓もないし、資本も得られそうではなかったが、三子から聞いている曖昧屋なるものは、自分の力ででもやってやれないことはなさそうに思われた。地道な稼業ではうまい儲けの得られないことを長い間知って来た彼女は、昔通って来た社会が利益の多いところだったように慾の上から思われたし、第一いろいろな男をあやつったり、いろいろな男に^{からか}揶揄われたりする楽しみは、ともすると思出されてならなかった。

「私には私の望みがあるのだしさ。姉さんは智慧もある

し腕もあるのに、面白い稼ぎもしないで、陰気な顔してボンヤリしてちや損じやないの」

三子がおそでを唆^{そその}かして帰ったあとで、おそでは上田を顧みて、今日は自分が俊一を病院へ連れて行こうと云ったが、

「俊ちゃんは少し熱があるようです。風邪をお引きになったのでしよう」と云って、上田は検温器を病児の脇の下へ挿んだ。

長吉が公園から市街の方を散歩して、コーヒー店へ寄

つたりなどして帰った時には、病院の代診が上田に呼び迎えられて、病児の腰部を洗滌せんできをして、発熱に対する注意をもして帰って行ったあとであった。おそでは代診に聞いたことを話して、

「昨日寒いのに停車場まで迎えに出たのがいけなかったんです」と、昂奮して上田の不注意をもなじった。

「そうばかりでもあるまいよ。昨日停車場で見た時に非常に窶やつれてると思った。医者とは別段変わったことも云わなかったのだね」

「変わったことって何も云わなかったわね、上田さん」

「ええ、何も仰有おっしゃいませんでした」

長吉は寝台の側へ寄って、萎しおれて老人らしい相をして
いる病児の顔を見入って、

「気分が悪いのかい。身体の何処が痛いなら痛い、気持
が悪いなら悪いと云って御覧」と訊ねたが、

「僕はどうもないんだ」と云って、俊一は額を擡しかめて目
を瞑つぶった。

「それならいいが黙ってちや駄目だぞ。上田さんでもお
父さんでもお母さんでも、お前のために此処についてる
んだから、安心して元氣を出さなきやいけないよ」

俊一は目を開けてうなずいたが、父の顔を見るのが煩うるさかつたので、再び目を瞑った。……発熱とそれに伴う五体の疲労によって悩まされたためか、平生茫然として人の顔を見たり人の話声を聞いたりしていた彼れも、今は見馴れた人間の顔も自分を苦しめるもののように思われだした。父母の顔でも絵本で見た赤鬼や青鬼のように見えだした。彼れはふと手を押して、寝台の側の柱に懸っている天狗の面を引ったくって畳の上へ拋出した。夫妻はそれを見て呆気に取られた。

そこへ、隣の主婦が冷し水と病院の薬とを持って来た

ので、上田は早速病児に服薬させたが、俊一は顔や手を動かせて彼女の接近を避けるように努めた。笠間や三子の顔も目の前にちらつくようで気持が悪かった。

「お薬はにがくって？」と、上田が訊ねると、
「いいえ、にがかない」

「お薬を飲んで温かくしてれば直ぐに癒りますよ。お母さんは、今夜は此処に泊るんだから安心していらっしやい」と、おそでが云うと、

「みんなが黙っていて呉れるといいんだけどな」と、俊一はこの別荘へ来て以来はじめてそう云った。

夫妻は声を潜めた。俊一は氷袋が額に載せられているのも関わらないで、顔を夜具の中へ引込めるようにした。そして周囲の声は暫らく聞えなくなつたが、これまでに耳に触れている人々の言葉が棘をもつて一つ一つ浮んで来た。さつき聞いていた三子と母親との話だつてハツキリ耳に覚えていたのだが、その話の意味がいくらか分ると、彼れの羸弱かよわい頭には痛かつた。「風邪を引いてもあの子の身体は危い」と、上田がある日笠間に話していたことを思出して、お医者さんや上田が云っているように、僕が今風邪を引いているのなら、僕は死ぬるかも知れな

いと、ひとりで考えられた。

「お前はとに角当分此方に泊ることにして、おれだけ帰って行こう。俊一の病気が若しも悪いようだったら、電報でも打てば直ぐにやって来るよ」と、長吉はおそでに云って、こまごました家の用事を互いにささやいたが、今日は病児をうしろに夫婦の別居生活に関わった話をヒソヒソとしているのが、おそでには手頼たよりなく淋しく思われて、しまいには妻子を此処へ置いて自分一人東京で暮らそうとする夫の心根を無慈悲の至りのように言いだした。

「だって、お前がそうしようと言ったのじゃないか。おれがこちらから毎日東京へ出勤する訳には行かないのだから、止むを得ないよ」と、長吉が穏かに云つても、おそではそういう条理の立った言葉にも耳を貸さないで、ブルブル首を振った。

「今日の俊一は不断とはちがうんです。いつか悲しい思いをしなければならぬと、何年もの長い間私たちが恐れていた日が来たのに、あなたは一人で東京へ行って勝手な真似をしようとしてるんじゃないやありませんか。あなたの顔を見ればあなたがお腹の中で何を企んでるか、私に

はちやんと分るんですからね」と、いきり立って、妹のおよねの事まで持出して声を荒らげた。

「じゃ、おれが店を止めて此処で何もしないでボンヤリ暮らすのがお前の本望なのかい。俊一の治療代にも差さ問もんえるようになってもいいって云うのかい」

「私は今のような陰気な貧乏暮らしをするために、あなたの処へ来たのじゃないんですよ。若いうちを面白い目もさせないでこき使しつて、俊一の身体に万一事があつたら、それをいい機し会おに私を追出そうと、あなたは思つてるにちがいないんだ」

二人の争いが募ってくると、上田は傍はたにいるのがいづらくなつて、そつと座を外はずして、隣の家へ行つたが、他人がいなくなると、おそでは夫の身体にむしやぶりついて悪態を吐きだした。殆んど一夜も離れないように同棲していながら、妻の肉体に嫌悪を覚えて疎々うとうとしくしている長吉は、その代りに妻の悪態や取組合いに苦しめられるのを我慢していたのであつたが、今夜は少しの理由もないのに、争いを起されたのをつい憤つて、拳をかためておそでの頬ぺたを殴りつけた。……十年の間お互いに自分の望みを殺して同棲していた鬱憤を相手に対して一

度期に晴らし合っているように、二人は次第に五体にある力を尽して争った。火鉢を引くり返したり、障子を倒すまでも止めなかった。

上田や隣の主婦が音を聞きつけて、そつと様子を見に庭先へ来た時には、おそでは青褪あおざめた顔して、ヒツヒツと泣入っていた。そして物心ついて以来、はじめてこういう男女の争いを見せつけられた俊一が、ひとり寢床を出て松葉杖突いて、寒い風の吹いている戸外へ出ようとして、玄関先に倒れたのを、夫妻は知らないでいた。

(大正十二年四月)

日本文学電子図書館

生まざりしならば

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系16 正宗白鳥集
筑摩書房

昭和44年7月15日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館